

『構造と力』

浅田彰著／勁草書房

「浅田彰」、ご存じだろうか？ 池上彰は知っていても、本書の著者である浅田彰の名前は知らない人が多いのではないだろうか。おそらくほとんどの人はその名を聞いたこともないだろう。

彼は唯一無比の頭脳の持ち主である。あるいは、人類史上でもまれに見る、高性能かつ高感度な「頭脳－機械」と言ったほうがいいかもしれない。その「頭脳－機械」の該博な知識と深い教養はほとんど無尽蔵で、おまけに正確無比な批評眼まで備わっている。学問領域では、専門の経済学、社会思想史は言うまでもなく、哲学、文学、歴史といった人文学系、社会科学系、そして数学、物理という理学系にも造詣が深く、さらに芸術全般（音楽、映画、建築、絵画など）についても卓越した批評家として縦横無尽に活躍している。また小説家から長野県知事に転身した田中康夫との対談シリーズ（『憂国呆談』 幻冬舎、1999年、など）では、アカデミズムの閉域を超え、国内・国際情勢あるいは各種マスメディアの情報を迅速かつ的確に分析し、現職の知事だった田中と対等以上の議論を応酬し、はてはサブカルチャー全般の超マイナーな情報を開陳したりと「頭脳－機械」として無敵の性能ぶりを発揮している。

彼の能力を物語る逸話は数え切れない。かつての東大総長で、その界限では「天皇」と呼ばれているとも言われる知的な巨人、蓮實重彦（フランス文学者（というより、世界的な映画批評家として有名）が、かつて翻訳した『マゾッホとサド』（ジル・ドゥルーズ著、晶文社、1973年）について、当時高校生だった浅田少年は300箇所にも及ぶ翻訳の誤りを指摘する注釈の文書をしたため蓮實宛てに送りつけたとか（これ、伝聞です）。

また、雑誌『InterCommunication』（No.33、NTT出版、2000年）の「21世紀に伝えたい本」と題された対談で、「世界のサカモト」こと坂本龍一と編集者の後藤繁雄は、浅田彰をあらゆる情報、書籍の究極のデータベースにして目利きと評して次のように語り合っている。

坂本—— [...] 浅田彰さんは、究極の編集者だよな。

後藤—— そう、必要な本はもってるし、引用部分はバッチリ押さえられるし、

相談すれば、すぐコピーが送られてくる。

坂本——ポイントに線まで引いてある（笑）。検索できて、目利きときてるし、

後藤——あっ、そうか。21世紀には浅田彰を残せばいいってことですか。

坂本——あー、そうだ!! 推薦図書、浅田彰、「一家に一台、浅田彰」。

（前掲雑誌、p. 17）

本書『構造と力』は、そんな彼が弱冠26歳にして上梓した衝撃（笑劇？）のデビュー作である。しかし、これほど高性能な「頭脳－機械」が書いた本だからといって、皆さんは尻込みするには及ばない。自身も述べているように、本書は「明快に、それこそチャート式参考書のように明快に」「軽くスピーディー」（p. 239）に書かれた、スバラシイ現代思想の見取り図だからである。

このブックガイド執筆にあたって、愛読してきた本書を改めて読み直してみたが、32年も前に出版されたにもかかわらず、そこには、まったく色褪せないどころか、混迷する現代の世界においてその洞察の正しさが確証されてきていると思われる、高密度に圧縮された精確無比で付加価値の高い情報が、どこまでも明快に、そして学術論文のうんざりする退屈さとは無縁の軽やかさで、ときに哄笑を誘いつつ展開されている。

本書全体を通底する論理はこう整理できるだろう。一方に、大学という「象牙の塔」に閉じこもって眼を血走らせながら専門の学問に「真面目に」打ち込むという態度を、他方に、日常的な常識から乖離し、タコ壺化してしまった学問の「ばかばかしさ」を外部から斜に構えて否定する「アイロニカル」な態度を置いてみる。このとき、この二つの陣営のいずれかに荷担するのでもなく、またこの二つを共に全否定するのでもなく、そのどちらの態度に対しても「ノリつつシラケ」「シラケつつノル」こと。あるいは、前者の観点から「対象と深くかわり全面的に没入すると同時に」、後者の観点から「対象を容赦なく突き放し切って捨てる」（p. 6）という終わりなき知性の澁刺な活動を実践すること。

「『明るい豊かな未来』を築くためにひたすら『真理探求の道』に励んでみたり、

企業社会のモラルに自己を同一化させて「奮励努力」してみたり、あるいはまた「革命の大義」とやらに目覚めて「盲目なる大衆」を領導せんとしてみたりするよりは、シラケることによってそうした既成の文脈一切から身を引き離し、一度すべてを相対化してみる方がずっといい。(…) その上であえて言うのだが、ここで「評論家」になってしまうというのはいただけない。(…) 自らは安全な「大所高所」に身を置いて、酒の肴に下界の事どもをあげつらうという態度には、知のダイナミズムなど求むべくもない。要は、自ら「濁れる世」の只中をうろつき、危険に身をさらしつつ、しかも、批判的な姿勢を崩さぬことである。」(pp. 5 - 6)

本書を読み直して驚いたことがもう一つある。それは、これが若き日の浅田が、過去の自分自身に対する反省を込めて(!)これから大学に入学する新入生(今だったら、皆さんのことですね)のために書いた本だということだ。

ここまでこの文章を「シラケつつ」読んできて、でもちょっと「ノれそう」だなあ、と感じた人、早速、図書館で手にとってご一読を。

執筆者紹介

重田 謙

アドバンストコース特任准教授。専門領域は、現代の言語・分析哲学。

『書名』 著者名 翻訳者名 出版社または文庫・シリーズ名 出版年 税込価格

『構造と力』 浅田彰著 勁草書房 1983年 2,376円

『憂国呆談』 浅田彰、田中康夫著 幻冬舎 1999年 1,944円

『マゾッホとサド』 Gilles Deleuze著 蓮實重彦訳 晶文社 (晶文選書) 1973年 品切

【雑誌】『InterCommunication No.33』 NTT出版 2000年 品切

ブックガイド目次へ